# 旅のロマネスク

松永伍一

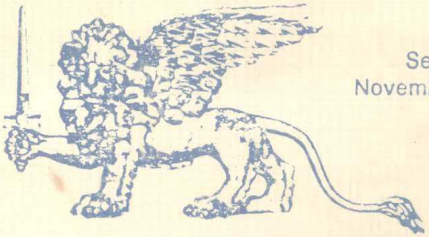
COMUNE DI VENEZIA
Assessorato alla cultura
e alle belle arti

SOVRINTENDENZA
AI BENI ARTISTICI E STORICI
DI VENEZIA

MOSTRA

## «GIORGIONE A VENEZIA»

Gallerie
dell'Accademia



Settembre
Novembre 1978

N° 32585

INGRESSO UNICO INTERO

# 旅のロマネスク

松下伍一

朝日新聞社

旅のロマネスク

一九七九年五月三十日第一刷発行

著者○松永伍一

発行者○藤田雄三

印刷所○図書印刷株式会社

発行所○朝日新聞社　東京　大阪　名古屋　北九州

東京都千代田区有楽町二―六―一　郵便番号一〇〇

電話代表〇三(212)〇一三一　振替東京〇―一七三〇

定価○千五百円

©1979 GOICHI MATSUNAGA

Printed in Japan　0095-254669-0042

# まえがき

これは私の旅の記録である。本にまとめるつもりもなく、一つの旅で一冊の克明に書いたノートがまとまり、それが五、六冊とたまっていった。同時に旅で感知したことがらを紀行文やエッセイにして発表もしてきたが、そんなときは、いつもノートをめくりイメージを整えるのが癖になっていた。雑然としたノートは、要と不要とを見きわめることを拒むように、頁にその折々の私の息づかいや感性のうねりをむき出しにしていたが、備忘録としての役割以上のものをそこに見出したときは、生きた人間に対するなつかしさに近いものを抱かされた。

公にした文は、それ自体で歩いていく。そこに哲学があり、支出の内訳があり、調査の内容があり、飲み食いの歓びがあっても、その三枚、五枚、十枚という限られた枚数の中では、どこかとりすましして、よそよそしい構えがあるものだ。物を書く人間の常として、公にされたものの内容については責任を負わねばならぬが、私はとりわけ旅に関してだけは、表現の楽屋裏を知らせることの方が、読んでもらう人たちに対しても親切ではないかと考えてきた。だから、一冊の本にするとかしないとかは別にして、旅のノートを紀行文やエッセイとつなげて公表してもいい、とおもっていたのである。公性と私性とを峻別するのも一つの節度だろうが、その二つを有機的に関連づけていくのも表現者の矜持かとおもう。五回の海外旅行が終った段階で、後者の立場から一冊の本にすることに踏みきった。

六回目はシシリー、北イタリア、スペインを歩き、この本が出る前に台湾へいくことにしているが、からだのつづくかぎり遠いところへ出かけることが私の思索の力を生むだろうとおもうので、ノートはこれからもつけてゆくはずであり、もしかしたら数年後に続篇が編まれるかもしれない。

ことわっておくが、このノートは飛行機や船やバスの中で、あるいは公園で、あるいは料理が出るまでのレストランで、あるいは眠りに入る前のベッドの中で、おもいうかぶものを書きとめていったものだから、物を集約的に見つめたり、文を練りあげたりして整えたものではない。いずれ、テーマは公にする文章の中で追求するのだという二段構えの姿勢で旅をしていたからである。それから、ノートの部分は、全体の量からすると三分の二ほどである。三分の一はこの本に入れられなかった。

なお、海外の旅を中心にまとめた『私のフィレンツェ』(講談社文庫)と『天正の虹』(講談社)画文集『神々の国へ』(凡画廊)などがあるが、それらもこのノートから拡大されたものであることを書き添えておきたい。参考にしてもらえればうれしい。

私としては、こういう旅の方法もある、あってもいいというつもりで、旅の好きなあなたに生身の人間の恥部もさらけ出した。

一九七九年四月　　著　者



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 旅のロマネスク ●目次

タイ・マレーシアの旅……5
風景と想像力○46
タイ幻域紀行○52
逆らわぬということ○62
メナム・デルタの農民○67
ヨーロッパの旅……79
アムステルダム余情○106
芸術家の運命○109
ノートルダム寺院にて○114
ヴェルレエヌのみぞれ○118
リュクサンブールにて○123
フィレンツェの雪○125
アッシジの坂道○128
コロッセオの猫○132
廃墟の生命感○136

シベリアの旅……145
シベリア幻想行○180
米と麦の地平○194
地中海の旅……201
地中海の瞑想○262
神と少年追跡行○266
地中海讃歌○300
ナザレ、その光と影○304
イスラエル・イランの旅……313
砂漠の遊牧民ベドウィン○336
ベドウィンにとっての時間○349
「聖なる街」の芸術家たち○353

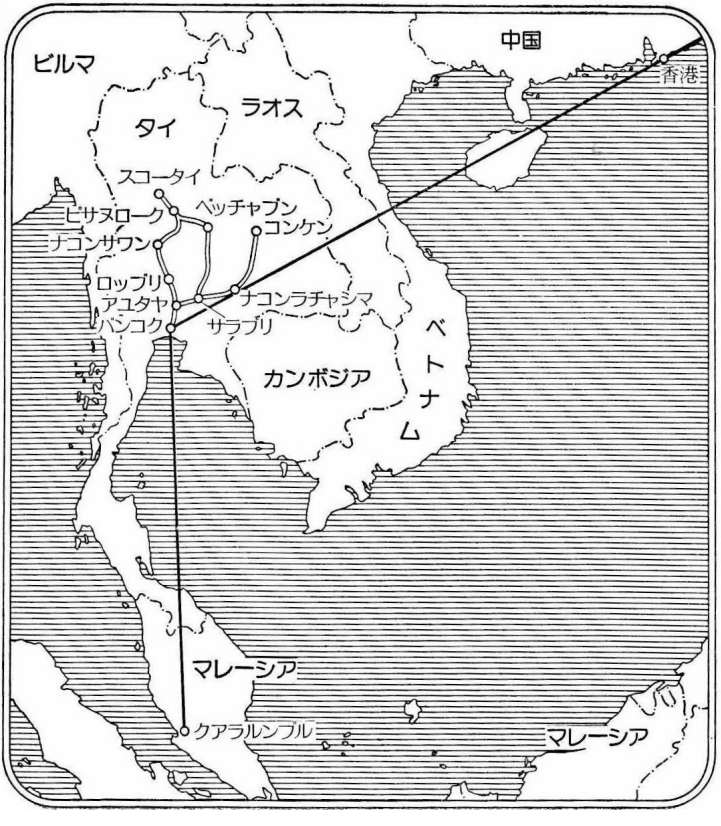
装丁●北原土久

# 旅のロマネスク

# タイ・マレーシアの旅

（一九七二年一一月一日――一一月一八日）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

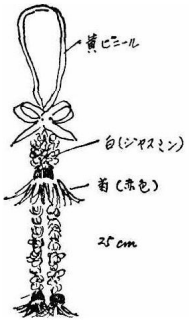

中国
香港
ビルマ
ラオス
タイ
スコータイ
ピサヌローク
ペッチャブン
コンケン
ナコンサワン
ロッブリ
アユタヤ
ナコンラチャシマ
バンコク
サラブリ
ベトナム
カンボジア
マレーシア
クアラルンプル
マレーシア

11月1日

午後四時四十分、ベトナム上空にさしかかる。メコン川が白蛇のようにくねっている。山岳がなく、密林の塊りが点々と見える。だから川だけが白灰色の帯となって目に入る。家が見えないのが気になる。人はどこにいるのか。上からベトナムを見おろす気持の複雑さ。それにしても戦場とは不気味な静かさのことであろうか。はげ山と密林のなかに、人はどんな幸福設計をしているだろうか。線が引かれ、何ものか得体の知れぬものが曲りくねっている。曲りくねっているのは川か、道か、漠としてわからぬものを、その「戦場」の中に見て、いまバンコクへ向う一人の日本人・私がいる。

高度を落す。タイの農村のよくひらけた田園風景が見える。川が直線に走る。人工性がある。運河であろう。その川ぞいに家が集村的形態で寄り合っている。防風林のような樹木の植え込みが、庄内平野を連想させた。あの一塊りは血族共同体でかたまっているのだろうか、知りたい。

五時四十五分、ドン・ホアン空港に着く。満月が空に出ている。入国事務が手間どる。荷物もなかなか出て来ない。山羊のようにタイの人間は軽い叫び声をあげている。騒がしい国だ。二〇ドルをタイの金（バーツ）に




替える。

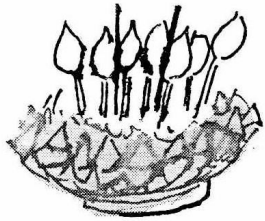
旧知の小林満里子さん夫妻の出迎えを受け、車で「新フジ・ホテル」に入る。299—301 Suriwong Road. Bangkok. 「泰京素里翁路門牌二九九至三〇一号」。バスつき八ドル。東洋風の建物で、安造り、荒削り、よく言えば簡素。天井にそなえつけた扇風機がゆっくりまわる。三階だが下を通過する車の音がうるさくきこえる。

小林夫妻から Manora Hotel の五階レストランで食事に招かれる。うす暗い部屋で日本人が日本語で話しているのだが、ここではそんなことは異様ではなくなっているとのことだ。バンコクに五、〇〇〇人の日本人がいるというから。半土着と新入日本人の意識のちがいについて話をきく。SINGHAというビール、飲める感じ。暑さのせいばかりではない。

話。「タイ人は地図の概念がないから、形而上的イメージもつくれない」「小雨が降ってもタイ人は傘をささない。日本人と雨や湿気に対する感覚がちがう」。

外へ出る。タクシーが渋滞している中を縫って、花売りの少年がやって来た。小林満里子さんが一バーツで、花を買う。

11月2日



西日本新聞バンコク支局の西村信氏と十一時にロビーで会い、案内してもらう。

WAT PRA KEO（エメラルド寺院）

王宮内にある。一七八五年の建築。タイの古典様式の寺院で、フレスコ画の長くつづく回廊があり、本堂にはマスラッド仏像が安置されている。十五世紀のもので一七八二年にタイにもたらされた。仏像はかすかに光るマスラッドの碧玉でつくられている。仏像は衣をつけている。当然衣更えの儀式もあるらしい。

フレスコの壁画は、チベットあたりの説話をもとにして描かれたものか。ちょっときわもの的なところがあり、またどこかに神秘性もある。荘厳とも言えないし、全体に泥くさいが、それだから親しめるという点で、わが真言密教における曼陀羅をいっそう通俗的に解体、拡大した感じを抱く。

感心したのは信者たちの態度。本堂の前にすわって美しい花をあげ、線香をあげて祈っている。祈り方はイスラム教徒のそれと似ている。からだを屈伸させるとき合掌する者もいれば、両掌を額に向けているものもいる。仏の加護にあずかろうという小乗仏教の発想に即して、自然だ。

上にあがるのに入場券がいる。公務員がその仕事をしている。下足番を何人も置いている。小役人たちの小遣銭稼ぎの印象。上に花ゴザが敷いて

あり、その上に七〇～八〇人がすわってお経の本をめくる。足は横あぐらで、その姿勢のまま拝む。正座しないのがおもしろい。若いのも多い。お経の発声法、日本と同じ。花と人間のコントラスト。陶酔の顔と、天井から周囲にちりばめられた宝石とのコントラスト。

現世利益的とよく言うが、この雰囲気は万国共通であろう。この「はげしい美しさ」は一体誰が欲したか。王か、民衆か、僧侶か。

外へ出て、タマサート大学の前を通る。大学生が花の咲いている木の下で勉強しているが、男だけで女が混っていない。男女がからまっているような日本の大学とのちがい、考えてよいテーマ。

近くの闇市風のマーケットをのぞく。男娼が二人いた。「ここにもこういう人間がいるのか」。三〇センチ程の大きなイタチが足もとを通る。仏像なんかも売っている。男娼の唇の紅と、唇を閉じた仏像を並べてみる。

WAT BENJAMABOPIT（大理石の寺）

一九〇〇年にイタリアの大理石を用いて作った。近代タイ寺院建築というべき壮観。本堂にはチナラジャ仏像を安置する。中国製の金色瓦が目立つ。回廊にはアジア各地から集められた仏像が並べてある。おもしろいのは羅漢のような「断食仏」。肋骨のすさまじさ。

鳩が多い。やさしく甘えている鳩。兵士たちの休息所か、かれらが鳩に

餌をやっている。軍隊の存在と平和の風景のアンバランス。タイらしい。川に亀が沢山いる。兵士たちが焼鳥を食っている。お寺の境内で焼鳥というのもどうかとおもうが、ここは休息する場所にもなっているのだから、許されるのだろう。それにしても「退屈ではないか、兵士よ」。

前の川べりに、今夜流す「ロイカトーン」(バナナの皮でつくった燈籠)の準備。美しい花を差したのや、小さい赤とか青の旗を立てたのもある。女たちがそれをつくっている。稼ぎどきだ。タイの女たちは意外に器用かも知れない。バナナの皮を切る女、つくる女、痩せ細った三つ四つの子供も手伝っている。そのそばに装甲車が置いてある。

ホテルへ戻って食事。タイ風カレー、西瓜、パパイアなど食べる。

西村氏と同道している間に、つぎの対話をしたことになる。要約すると……。

――タイ人は小乗仏教を信じているが、信仰はきびしいですか?

「小さいときから僧侶になることを誇りにしています。世の中に出るときでも、どの程度、何年仏教を信じ僧侶の生活をしたかが評価の基準になる。一種のエリート意識とつながっています」。(イギリス、アメリカなどへ留学したがる例の政治・経済進出型のエリートとちがう)。

――そうだとすると僧侶になるというのは、真の仏教からの救済とは別



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com